連載コラム

みずき野とその周辺の植物と昆虫

第８回
美しいタデの仲間たち

本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫
（８）美しいタデの仲間たち

わが歩む　小野の上にて　蓼の花
咲くべくなりぬ　夏終りけり　　斎藤茂吉

初夏から夏に咲き始める美しいタデの仲間はかなり多いのですが、その季節にはまだほとんど目立ちません。夏草が衰える初秋の頃になると、数も増し、色も鮮やかになって、急に目立ちはじめます。タデの花の群れに気付いて、秋の到来を感じることは私も毎年経験しています。今回は、みずき野周辺に見られた美しいタデの仲間を紹介したいと思います。

（１）イヌタデ、オオイヌタデ、ハナタデ、オオケタデ

イヌタデは高さ２０～５０センチと比較的小さく、みずき野周辺でも最も普通のタデです。イヌタデという名を知らない人でも、アカマンマ、あるいはアカノマンマと言えば、あの植物かと気付くでしょう。子どもの頃、アカマンマの花で、ままごと遊びをした人もいることでしょう。

「北の国ではもう秋だ
あかのまんまの　つゆくさの　鴉揚羽（からすあげは）の八月は
秋は夏のおはりです　・・・」

これは三好達治の「北の国では」という詩の冒頭の一節です。

アカマンマは夏の終わり頃、ぽつぽつ目につくようになり、秋が深まるにつれて、群生して、美しく野を飾ります。

イヌタデ
１０月上旬
本町地区

オオイヌタデはイヌタデに似ていますが、ずっと太く、高さも１メートルを越えるものが多いのです。オオイヌタデは花色に変異があり、イヌタデに近いピンクからピンクと白の中間や白色のものまであります。

オオイヌタデ
７月中旬～９月中旬　本町地区

オオイヌタデの近似種にサナエタデがあり、こちらは高さ３０～６０センチと小振りで、茎の節がオオイヌタデほどふくらまず、葉の側脈が少ないなどの特徴によって区別できます。しかし残念ながら写真を撮っていませんでした。

ハナタデは林の中など、木陰に生えるタデで、高さは３０～６０センチ程度。イヌタデに似ていますが、花は穂先にまばらにつき、イヌタデより華奢な感じです。牧野富太郎はハナタデという名は本来イヌタデに冠すべきものであって、現在ハナタデと名付けられているタデはヤブタデと呼ぶべきであることを主張しています。そして、このヤブタデについては「その花穂は痩せ花は小さくて貧弱、色は淡紅紫で浅く、けっしてハナタデの名にふさわしくない」と酷評しています（牧野富太郎「植物一日一題」ちくま学芸文庫）。

でも私は、アカマンマの派手さ、明るさはなくても、木陰にひっそりと咲くハナタデは落ち着いて、充分に美しいと感じています。

ハナタデ　１０月上旬
本町地区

オオケタデは高さ２メートルに達するような大型の１年草です。花穂はたれさがり、長さは５～１０センチほどになります。東南アジア原産で日本には江戸時代に入ってきたようです。もともと園芸種として利用されているものですが、野生化していて、みずき野周辺でも、市街の空地などに自生しているのをたまに見かけます。

オオケタデ　８月下旬
本町地区

イタドリも秋に白い花を咲かせるタデの一種で、土手などにごく普通の植物で、みずき野周辺には小貝川の土手などに生えていますが、花を咲かせているものを見たことがありません。

（２）サクラタデとシロバナサクラタデ

サクラタデは花が大きく、最も美しいタデの一つです。しかしみずき野周辺ではほとんど見られません。私はただ一度、２００８年９月に本町地区の田の畦にサクラタデを２、３本みつけました。しかし翌年の同時期に同じ場所に行ってみたのですが、見つけることができませんでした。サクラタデは多年草なのですが、除草によって消えてしまったのでしょう。再びサクラタデを見たのは向島百花園でした。

サクラタデ
９月中旬
本町地区

シロバナサクラタデは同じく多年草で、花はサクラタデより幾分小さいのですが、白い花がよく目立ちます。みずき野周辺では、本町地区の畦や、貝塚水路の周辺によく見られます。ただ最近は数年前より少なくなったように思います。

シロバナサクラタデ
８月下旬　本町地区

（３）茎にとげのあるタデの仲間

湿地を好み、茎に逆さ向きのとげがあって、触ると痛いタデ類です。とげは側に生えている草の茎などに引っ掛けて、上によじ登るための道具と考えられます。花はどの植物もよく似ていますが、葉のかたちでそれぞれを容易に識別することができます。これらのタデ類はほとんどが１年草で、個体は１年で枯れてしまいますが、花をたくさん付け、種子を量産するので、子孫代々繁栄して行きます。

ママコノシリヌグイは茎に生えた鋭いとげがその名前の由来になっています。差別用語が使われている植物名の例として、よく引用されています。こんなひどい名にもかかわらず、ママコノシリヌグイは可憐で美しい花を咲かせます。

ママコノシリヌグイ
７月下旬
８丁目東斜面下

アキノウナギツカミもまたとげから連想された名なのでしょう。するどいとげがたくさん生えている茎を使えば、ぬるぬるしたウナギも掴めそうな感じがします。湿地に群生してミゾソバなどと美を競っています。

アキノウナギツカミの葉は基部が二つに分かれて、茎を挟んでいます。

アキノウナギツカミ
１０月上旬～中旬
さくらの杜公園東
上高井地区

ヤノネグサも湿地を好むタデで、その名は葉のかたちが矢の根（矢じり）に似ているところから名付けられた名称です。花は開いているものがなかなか見られず、写真に撮ったものも花はつぼみばかりでした。

ヤノネグサ
１０月中旬
さくらの杜公園東
上高井地区

サデクサも葉のかたちによって判別できます。ヤノネグサの葉が矢じりに似ているとすれば、サデクサの葉は三叉に分かれた槍または桙（ほこ）の先端のようなかたちです。サデクサは２０の都道府県で絶滅種、絶滅危惧種、あるいは準絶滅危惧種に指定されていますが、幸いにしてみずき野周辺ではまだ生存しています。花の色は個体によって変異が見られます。

サデクサ
９月上旬～１０月中旬
貝塚地区

イシミカワも湿地に見られますが、比較的乾いた場所にも生えています。花は白色ないし淡い緑色で地味ですが、果実は白、赤紫、青と成熟するにしたがって色が変わり、なかなか美しいものです。イシミカワの名の由来は不明です。

イシミカワ
花：７月上旬
実：１０月中旬～１１月下旬
本町地区

ミゾソバは湿地をしばしば覆いつくすほど繁殖旺盛な美しいタデで、花色は個体によって、ピンク、紅色、白色など変異がみられます。葉のかたちを牛の顔になぞらえて、ウシノヒタイという別名があります。

ミゾソバ
１０月上旬～中旬
本町地区

（４）ヤナギタデとボントクタデ

「蓼食う虫も好き好き（たでくうむしもすきずき）」という諺があり、広辞苑には「辛い蓼を食う虫もあるように、人の好みはさまざまである」と説明されています。この「辛い蓼」はヤナギタデのことです。このタデ以外に、辛いタデは存在しません。ヤナギタデは別名ホンタデあるいはマタデとよばれ、ただタデといえば、ヤナギタデを指すことも多いようです。

ヤナギタデ　１０月中旬　第２調整池北隣接地

刺身のつまに使われる紅色の芽生えはベニタデとよばれ、ヤナギタデの栽培品種です。また、若いヤナギタデの葉から作られた蓼酢はアユの塩焼きなどに薬味として添えられます。

ヤナギタデは含まれる辛み成分により昆虫による食害を防護しているようですが、それでもヤナギタデを食べる虫が何種かいるそうです。まさに「蓼食う虫」です。

谷崎潤一郎は、「人の好みはさまざま」な人間模様を象徴する小説「蓼食う虫」を書きました。東京育ちであるが、大阪府の豊中に住む、小学４年の子供をもちながら、精神的にも肉体的にも愛を失った斯波要・美佐子夫婦の物語で、要は美佐子が須磨に住む恋人阿曽のもとに通うことを公認し、やがて離婚することを夫婦とも決めています。要自身はまた神戸の外国人娼婦ルイーズと関係をもっています。京都鹿ヶ谷に住む美佐子の父は３０歳も若い２０代前後の京女お久を妾にもち、自分の古風な趣味に合わせて、わざわざ大阪に住む検校に地唄をならわせ、時代離れした布地の衣服を着せ、自分本位に人形のように扱っています。この義父が要とお久をさそって３人連れで淡路島に人形浄瑠璃を見に行くという出来事があって、要はお久に微妙な感情をもつことになります。

この小説は谷崎の妻千代を小説家佐藤春夫になぜ譲渡したのかを考える手がかりになりますが、小説の中での美佐子の恋人阿曽は佐藤をモデルにしたものではありません。ヤナギタデに因んで、余分なことを書きました。

ボントクタデの群生　９月中旬　第２調整池北隣接地

ボントクタデはこのヤナギタデに外観がよく似たタデです。ヤナギタデは湿地に生えますが、ボントクタデも同じ環境に育ち、ときには両種が混じって生えています。慣れてくると、ヤナギタデとボントクタデは外観で分かるようになりますが、最初はなかなか識別できませんでした。識別するには、葉をちぎって噛んでみるのが一番です。舌の上でぴりっときたらヤナギタデ、そうでなければボントクタデです。

ボントクタデという名は、噛んでもぴりっとしないことから付いたのだそうです。「ぼんとく」とはどこかの地方の方言で、「ぽんつく」とか「まぬけ」という意味です。あいつは賢いのにお前は「ぽんつく」だと言われて、ボントクタデは口惜しい思いをしているでしょう。

ボントクタデの花
９月中旬
第２調整池北隣接地

こんな思いを救っているのが牧野富太郎の言葉です。「この蓼はその味からいえばポンツクだが、その姿からいえばまことに雅趣掬（きく）すべき野蓼で、優に蓼花の秋にふさわしいものである。茎は日に照り赤色を呈して緑葉と相映じ、枝端に垂れ下がる花穂の花は調和よく紅緑相雑（まじ）わり、それが水辺に垂れている風姿はじつに秋のシンボルであって、他の凡蓼の及ぶところではない」。

このあと、「私はこの蓼がこの上もなく好きである。あまり好きなので柄にもなく左（ここでは下になりますが）の拙吟を試みてみたが、無論落第ものの標本だろう」として、次の五句を載せています。

紅緑の花咲く蓼や秋の色

水際に蓼の垂り穂や秋の晴れ

我が姿水に映つして蓼の花

一川の岸に穂を垂る蓼の秋

秋深けて冴え残りけり蓼の花

牧野富太郎「植物一日一題」ちくま学芸文庫版）。

（５）ソバの花

人と最も関係の深いタデの仲間は、アイ（藍）（別名アイタデ、タデアイ）とソバだと思います。アイは藍染めの原料で、かつては最も重要な植物の一つでした。化学染料が普及した今でも、アイを原料とする伝統的な藍染めは継承されているようです。ただし、アイは栽培種で、守谷では藍染めのためのアイを栽培している場所はなさそうですから、みずき野周辺でアイをみる機会はほとんどないと思われます。

ソバは東アジアに原産し、日本では栽培種で、蕎麦粉の原料として、重要な作物です。守谷でも大規模ではありませんが、白く花咲くソバ畑が見られます。また道ばたや野原にも１本、２本と逸出して咲いているのを見かけることがあります。

水田の傍に逃げてきたソバ
７月上旬　本町地区

三日月に　地はおぼろなり
蕎麦の花
松尾芭蕉　（一葉集より）

同様の句は句集「浮世の花」、「三日月日記」、「泊船集」にも収録されていますが、それぞれ多少、表現が異なっています。山本健吉は、最も表現として妥当性をもつとして、「一葉集」のものを推奨しています（山本健吉「芭蕉」新潮文庫版）。元禄５年（1692）作。晩年の４８歳頃の句です。この年深川に新芭蕉庵ができています。この句の風景がどこなのか分からないのですが、山本健吉は江東方面の一面の蕎麦畠が想像されるとしています。

三日月の下、一面に咲く蕎麦の花が白く、おぼろに霞んで見えるおだやかな風景が想像できる一句です。

2014年11月
本吉　總男